

日高山1号墳出土の木心鉄板張輪鎧

1 はじめに

日高山1号墳は、藤原宮朱雀門南方に位置する日高山の上に築かれた方墳である。一辺が16~17mの大きさで、幅4~6mの周溝をもつ(図28)。藤原京の造営とともにあって墳丘が大きく削平され、埋葬施設の種類や規模は不明である。円筒埴輪と蓋形埴輪や鶴形埴輪をともない、5世紀中ごろの築造と考えられている(『藤原概報15』)。周溝から木心鉄板張輪鎧が出土しているが、実測図や写真等は未報告である。埴輪の時期からみると、日本列島内では資料が乏しい初期馬具段階¹⁾の木心鉄板張輪鎧であり、資料の重要性に鑑みて本稿で資料の報告をおこなう。

2 資料の概要

出土位置 木心鉄板張輪鎧の出土位置については、概報に「涅埋土最下部から出土した馬具小片」と記されるのみであるが、調査日誌や遺構実測図により、この木心鉄板張輪鎧一括が、南側周溝のNo.8の埴輪付近で出土したことを確認した。また、出土層位については概報に記されたように周溝埋土最下部のほぼ底面に近い位置で出土したとみられる。周溝は6世紀前半代の埴輪や6世紀後半から7世紀初頭の須恵器・土師器を含む層によって埋没しているので、木心鉄板張輪鎧は本来、周溝内に埋葬された馬にともなうものであった可能性が高いと考えられる²⁾。

資料の概要 柄部と輪部の側面の一部を厚さ1~2mmの鉄板で補強した木心鉄板張輪鎧の破片である。破片は5点が存在するが、このうち図29・30に示す1、2が柄部の破片、4、5が輪部の破片で、3は柄部から輪部にかけての屈曲部の破片とみられる。側面鉄板の幅は柄部、輪部とも0.8~1.1cmである。木心部分はほとんど遺存しないが、各所に打たれた鉢の長さや形状により、全体の構造を推定することが可能である。木心部分は一本をたも状に折り曲げて、柄部と輪部をつくり、柄部と輪部の接合部に三角形の木材を嵌め込んだとみられる。1は一方の端部が遺存することから、柄頭部から柄部中位

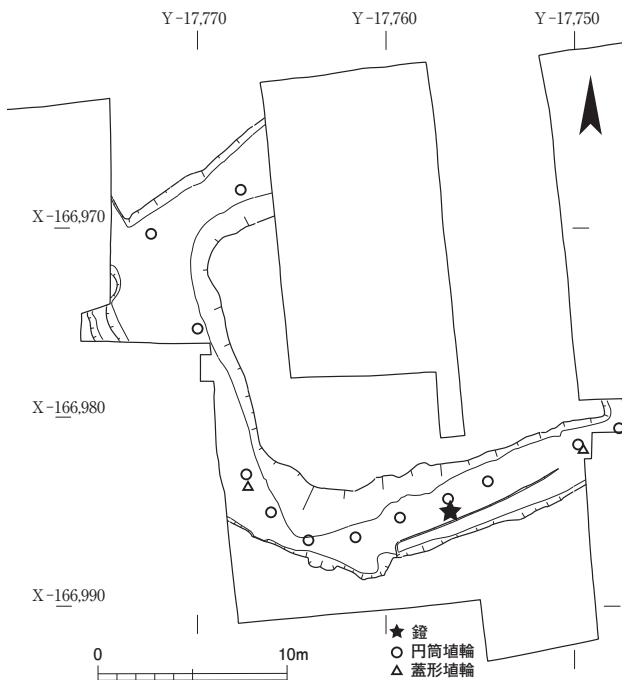


図28 日高山1号墳平面図・鎧出土位置(1:400)

までを覆う逆U字形の鉄板の破片とみられる。3つの鉢孔が確認できる。上部には鉢孔の一部が残り、下端部に鉢頭径5mm、鉢頭高1.5mm、太さ3mmの鉢が打ち込まれる。下端部の鉢寄りに径3mmの鉢孔があるが、使用されなかった可能性がある。2は柄部の側面鉄板をつなぐ鉢である。長さ4.5cm、径5mmで、断面はやや扁円形である。鉢脚の中位には木心の合わせ目の痕跡が確認でき、たも状に曲げた木心を二本合わせているとみられる。図の右端の鉄板は柄部側面を覆う鉄板であるが、変形して位置がずれている。3は柄部から輪部にかけての屈曲部の破片である。柄部側も、輪部側も欠損する。屈曲部に打たれた鉢の下に輪部に向かって打たれた円頭打ち込み鉢が残る。鉢脚先端の一部と鉢頭を欠く。4は輪部中位を覆う端部の破片である。端部は一部を欠損するが、丸くおさめる。端部に接して、木心輪部に打たれた円頭打ち込み鉢が残る。鉢は鉢頭径4.5mm、鉢頭高1mmである。5は輪部上半を覆う鉄板である。中央付近に木心輪部に打たれた円頭打ち込み鉢が残る。鉢は鉢頭径4.5mm、鉢頭高1mmである。

類例と位置づけ 残存する破片から推定復元される鎧は、柄部の幅が輪部の幅2本分程度の幅広で、長さが短い、いわゆる「短柄」である。前後面の補強鉄板は現状では認められない。輪部は踏込部の情報が少ないものの、側面鉄板の幅からみて踏込部も同じ太さであったと推定され、柳昌煥のIA2式³⁾に該当するとみられる。朝

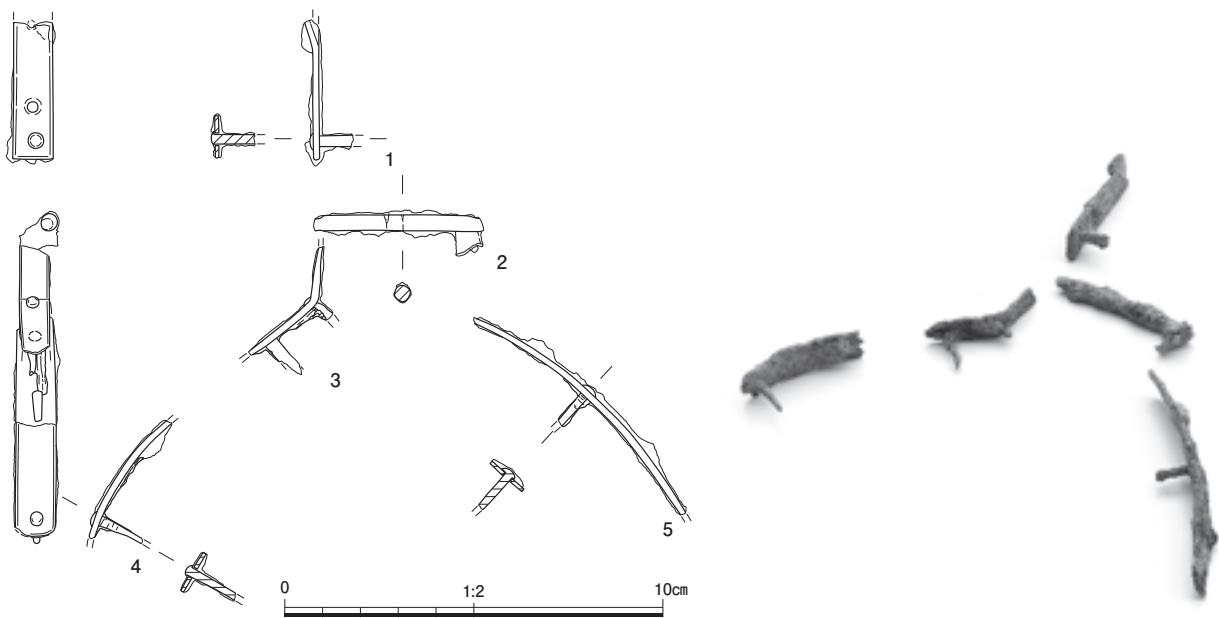


図29 日高山1号墳出土木心鉄板張輪鎧実測図(1:2)およびその写真

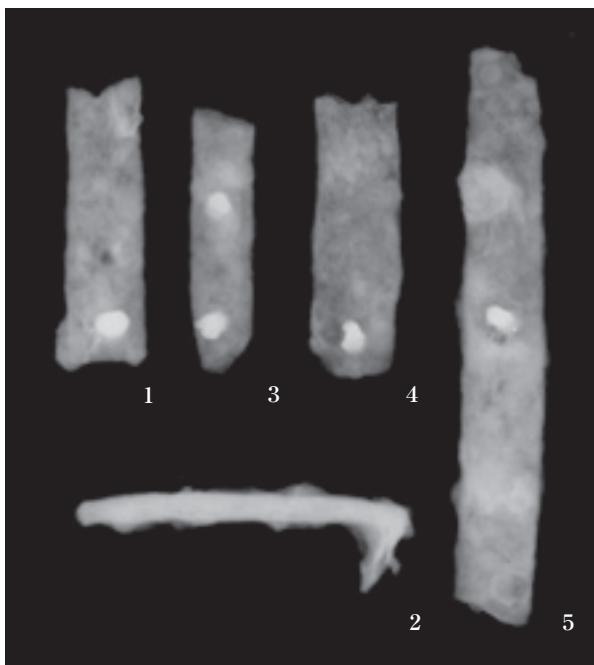


図30 日高山1号墳出土木心鉄板張輪鎧X線ラジオグラフィー(1:1)
鮮半島では、大加耶陝川地域の玉田23号墳例、同67-B号墳例などがあり、これらは諫早編年大加耶I段階に位置づけられる。日本列島では、滋賀県新開1号墳南遺構の鎧が同様のものとなる可能性がある。いずれにしても5世紀前半を中心とする時期のものとみられる。

3 日高山1号墳出土木心鉄板張輪鎧の意義

日高山1号墳出土の木心鉄板張輪鎧は初期馬具段階の5世紀前半代のものと位置付けることが可能である。奈良盆地内では、初期馬具段階の馬具が少ないが、注目されるのは、日高山1号墳の東方1.7kmに位置する南山4

号墳である。南山4号墳からは騎馬人物形土器などの陶質土器と多量の鉄鋌のほかに、諫早編年II段階の鏹轡が出土している⁴⁾。これらのことから、藤原京造営以前の当該地域においては畿内地域の中でも比較的早い段階から馬匹と乗馬の風習が取り入れられたことがうかがえる。近年の藤原宮・京下層遺跡の調査では5世紀後半段階にまでさかのぼる可能性のある馬歯などの資料の蓄積が進んでいるが⁵⁾、今後、これをさかのぼる初期馬具段階の馬遺体の確認も期待される。

本稿には、JSPS科研費18H05633による成果の一部を含む。
(片山健太郎／総社市)

謝辞

木心鉄板張輪鎧については諫早直人氏（京都府立大学）、埴輪について廣瀬覚氏のご教示を得た。記して感謝申し上げる。

註

- 1) 初期馬具の定義と年代観については諫早直人の日本列島で独自の定型性をもった馬具が生産される以前の段階の馬具とする定義と、概ね5世紀中葉までもとのとする年代観に従う。諫早直人『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣出版、2012。
- 2) 他に、築造後、6世紀前半までの間に埋葬施設から取り出されて周溝に投棄された可能性なども考えられる。
- 3) 柳昌煥「伽耶古墳出土鎧子에 대한研究」『韓国考古学報』33、91-135頁、1995。
- 4) 阪口俊幸「南山古墳群」『速報展 大和を掘る－1983年度発掘調査概報－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、28-29頁、1984。および前掲註1。
- 5) 最近の例として、飛鳥・藤原第201-1次調査で四分遺跡の斜行溝SD11570から出土した馬歯などがある（『紀要2020』）。